

月明の一痕としてわが歩む

藤田湘子

六十代の代表句。写真や絵を見るように一読印象に残り、多くの俳人が批評を記している。

大景「月明」から「わが歩む」へ、ぎゅつと絞込むズームレンズの手法。地上に墮とされたルシファーではないが、自分を「一痕」と捉える厳しさには驚かされた。

確かに、影があるからこそ光が認識され、森羅万象、宇宙の事物の陰陽の二面性までもが感じられる。

飯島晴子は、湘子俳句の特徴として叙情性と甘さに惹かれたと書いていたが、この句には甘さは無い。即物的な一痕。まさに地上を監視する人工衛星のカメラでクローズアップされた人影。スマートフォンやアップルタグを持った我々は、もはや逃れることもできない。

1987年（昭和62年）第九句集『前夜』 鑑賞・轍郁摩